

令和3年度第1回岐阜県総合教育会議 議事録

1 開催日時及び場所

令和3年7月29日(木) 16時00分 ~ 17時15分

岐阜県庁舎 4階特別会議室

2 出席者

知事 古田 肇

教育長 堀 貴雄

委員 稲本 正

委員 野原 正美

委員 竹中 裕紀

委員 近藤 恵里

委員 村上 啓雄

3 関係者

岐阜高等学校 校長 石田 達也

慶應義塾大学 教授 SFC研究所 Society5.0ラボ 代表 鈴木 寛

4 オブザーバー

清流の国推進部長 丸山 淳

副教育長 北川 幹根

5 陪席

教育次長 高橋 宗彦

清流の国づくり政策課長 村田 直也

教育総務課長 松本 順志

6 議事録

別紙のとおり

# 議 事 録

発 言 者	発 言 内 容
清流の国 推進部長	<p>これより岐阜県総合教育会議を開催する。</p> <p>本日の会議は、モニターとタブレット端末を使用する。説明資料はモニターに表示されるが、説明資料で気になるページがある場合は、端末に同様の資料が入っているので、適宜操作いただきたい。</p> <p>本日は「ふるさと教育の充実について」を議題とする。</p> <p>慶應義塾大学教授で、S F C研究所 Society5.0 ラボ代表の鈴木 寛先生にも、ゲストスピーカーとしてオンラインでご出席いただく。後ほどご講演いただくので、よろしく願います。</p> <p>それではまず、「県立高校における取組み」について、副教育長から説明をお願いします。</p>
副教育長	<p>現在、県では令和元年度からの5年間、「『清流の国ぎふ』創生総合戦略」に基づいて、「『清流の国ぎふ』を支える人づくり」や、「地域にあふれる魅力と活力づくり」などに取り組んでいる。</p> <p>各部局が連携を密にしながら、オール岐阜で、「地域や企業と連携したふるさと教育の展開」や「産業を支える人材の育成・確保」など、重要政策課題に取り組んでいる。この中で、「ふるさとの文化や産業、自然などに関する探究的な学び」については、「ふるさと教育」として、教育委員会が主となり推進することとされており、同じく令和元年度からの5年間を計画期間とした「第3次岐阜県教育ビジョン」において、重点的に取り組む施策として、小・中・高校で一貫したふるさと教育の推進を位置付け、全ての県立高校において、小・中学校での学びをベースに、各高校の特色に応じた「教科横断的で、探究的な学び」に取り組んでいる。</p> <p>このように、本県では、各教科での学習を統合した探究的な学びとして、ふるさと教育に力を入れているところだが、近年、「STEAM教育」という教育手法が</p>

	<p>注目されている。</p> <p>この「STEAM」とは、Science(科学)、Technology(技術)、Engineering(工学)、Liberal Arts(教養)、Mathematics(数学)の5つの頭文字をとった言葉である。STEAM教育は、5つの言葉にも表れているように、「各教科での学習を基礎としつつ、様々な情報を活用しながら、それらを統合し、実社会での課題発見・解決に結びつけていくための教科横断的な教育」である。また、令和4年度から実施の「新学習指導要領」にも、教科横断的な教育の重要性が示されている。</p> <p>教育委員会では、現在推進しているふるさと教育に、このSTEAM教育の理念を取り入れ、子どもたちの探究的な学びをさらに進化・充実させ、将来、このふるさと岐阜を支える人材や世界で活躍する人材の育成に取り組んでいきたいと考えている。</p> <p>最後に、資料の右端をご覧ください。ふるさと教育における各高校での取り組み内容を、普通科高校、小規模高校、専門高校など種類ごとにまとめたものである。一番下には、今年度から一部のモデル校で取り組んでいる「スーパー・インクワイアリー・ハイスクール」について記載してある。</p> <p>岐阜高校などモデル校5校では、来年度からの新学習指導要領の実施に先立ち、これまでのふるさと教育にSTEAM教育の理念を取り入れた取り組みを進めている。また、この実施成果は各高校に横展開することとしている。</p> <p>本日は、モデル校として岐阜高校の石田校長にお越しいただいており、岐阜高校のふるさと教育に関する取り組みについて伺う。</p> <p>説明は以上である。</p>
石田校長	<p>岐阜高校におけるふるさと教育の取り組みについて説明する。</p> <p>県内の各高校では「総合的な探究の時間」を実施している。本校ではその時間を「Future Planning Time」通称FPTとして、1・2年生全員が、既存の教科の枠にとらわれず、また理系・文系にもとらわれずに、個人または数名でテーマを決めて、探究活動に取り組んでいる。</p> <p>具体的には、1年生では、各大学・学部での研究内容の調査、関連する文献や資料の検索を行った上で、探究テーマを決める。引き続き、2年生で探究を進め、</p>

2年生の後半には、クラス内でのプレゼンテーションを経て、クラス代表生徒が「FPT探究活動 学年発表会」において、探究活動の成果を発表する。

昨年度の探究活動のテーマをご紹介すると、例えば「睡眠の質と生活」「QRコードのその先へ」「コンビニとの向き合い方」「女性が育休後に復帰しやすい職場とは」など、多種多様である。中には、「人種差別の変遷」「貧困と水との関わり」「宇宙エレベーター」といった地球規模のテーマもあれば、「岐阜の河川を探る」「環境DNA解析による長良川アユ」「地域医療の現状と未来」などの地域を深く考察するテーマもあった。

資料について説明する。

本校の大きな特徴は、通常の授業の時間以外に、色々な体験プログラムを「グローバルリーダー養成事業」として実施していることにある。

これから紹介する「グローバルリーダー養成事業」の各種プログラムの目的は、「将来、社会や世界で活躍できるリーダーを育成すること」「様々な体験を通して、強い刺激を与え、生徒1人1人の心に火をつけること」の2つである。

1つ目は「グローバルに活躍する卒業生による講演会」である。

昨年度、みずほ銀行常任顧問の林氏に、グローバル経済の急激な変化に関するお話とともに、経営者として、データ分析や決断の重要性についてお話しいただいた。今年度は、県総合医療センター新生児内科医長の寺澤氏に、新生児医療の最先端技術に関するお話とともに、患者や家族の心に寄り添うカウンセリングマインド、生命倫理、命の重さなど、まさに理系・文系の枠を越えて、お話しいただいた。

2つ目は「職業・学問体験プログラム」である。

今年度の事例では、新聞社の解説委員から「私たちと政治」、大学大学院薬学研究科の先生から「がんワクチン療法の開発」、デザイン事務所の方から、ちょうど先日の東京オリンピックの開会式でもあったが、「東京2020スポーツピクトグラムのデザイン」など、多種多様な職業・学問分野の第一人者の講演をお聞きするプログラムを設けている。

3つ目は「最先端科学体験プログラム」である。

昨年度は、かかみがはら航空宇宙博物館より講師をお招きして、各務原市の航空

宇宙産業について説明いただき、翌週にはプログラミング実習を実施した。今年度は、金属鉱物資源機構から講師をお招きしたり、化学系企業の講師から瞬間接着剤の開発についてお話いただき、後半はともに、実験実習を生徒の前で実施いただいた。

また、「国際交流体験プログラム」は、英語エンパワーメントプログラムと題して、外国からの大学留学生とともに、5日間、英語漬けで交流や意見交換、討議を行うプログラムである。今年度は8月16日から20日に実施する予定である。即興型英語ディベート大会では、その場で示された議題についてディベートする。具体的には、移民問題、働き方改革、AIと労働、人口減少など、多岐に渡る題材でディベートをしている。また、海外研修として、アメリカ東海岸とマレーシア・ボルネオ島等への研修を毎年3月に実施してきた。現在はコロナで中断しているが、今年度末の3月にまた実施できることを願っている。

それから、全国的なコンテストとして、「科学の甲子園」や「模擬国連大会」にも参加している。

科学の甲子園では、理数の筆記部門とともに、当日与えられた課題に対して、作品を制作したり、実験データを取るといった実技部門もあり、本大会を前に、本校主催で、全国の出場校との合同学習会を毎年実施している。今年度は、その様子を中学生にもオンラインで公開できるよう検討を進めている。

最後に、「高大接続プログラムへの参加」である。例年、東京大学の研究室を訪問して、ゼミ形式の講義を実際に体験するプログラムを実施している。残念ながら、昨今の情勢を鑑み、今年度は、来月8月6日に東京大学とオンラインでつなぎ、研究室の紹介や体験授業を行ってもらう。

これらの取組みは、全生徒を対象とするものもあれば、希望者を募って実施しているものもあるが、それぞれの生徒が興味や関心のある体験プログラムを見つけ、非常に積極的に参加しており、本当に頼もしく思っている。

グローバルな広い世界を体験し、刺激を受けた上で、地域に還元できることを模索し探究していく。これが本校の目指すふるさと教育だと考えている。

ここで、生徒のインタビューを含めた動画を作成したので、ご覧いただきたい。

	<p>&lt;動画視聴&gt;</p> <p>動画において、最後の女子生徒が話していたように、理系・文系の垣根をなくす、または、理系と文系を融合して、色々なことを進めていくことが本当に必要だと感じる。</p> <p>本日説明した、探究活動や各種体験プログラムの実施にあたり、STEAM教育の理念を踏まえて、今以上に、教科横断的なテーマを掲げ、さらにそういったテーマを強く意識して、それぞれの取組みを充実させていきたい。</p> <p>以上で、説明を終わらせていただく。</p>
意見交換	
稲本委員	<p>発表の中で、鮎の遺伝子を調べているというのがすごく面白いと思う。日本の鮎は、長良川の鮎が長良川で生まれたわけではなくて琵琶湖で生まれたりしている。地の鮎と、外から来た鮎が混合したり、分かれたままだったりして、遺伝子的なものまで調べるとするのは意外とできてない。</p> <p>ふるさと教育から、将来の日本にとってどういう研究や、どういう分野が重要なのかということがわかる。そういう点でとても評価できる。</p> <p>ふるさと教育などを通じて、歴史と自然をいかに未来につなげていくのか、科学や文学、文系・理系を越えたところで、未来の日本を担う子が増えてくると嬉しい。その芽が出てきているのがとても嬉しい。</p>
野原委員	<p>小学校、中学校だと、地域が限られているので、ふるさと教育というのは地元の宝物を見つけるなど取っ付き易いと思うが、高校はあちこちから生徒が集まってきて、こういう視点を生徒に持たせるために、アドバイスや、声かけなどの取組みはしていたのか。</p>
石田校長	<p>本校として考えていることは、まずは広い世界を見てみよう、それから色々な専門の方に刺激をもらおうということでこのプログラムを組んでいる。そうしたこととふるさと教育にどういう繋がりがあるかということ、広い世界や、専門の方からの見地を聞いたところで、もう一度、例えば自分の故郷を見てみようとか、岐阜県を見てみようといったときに、広い世界を見た後に自分たちの地域を見ると、視点が</p>

	<p>変わっていると思うし、変わっていてほしいと思う。</p> <p>全世界的な課題が、例えば岐阜県でも課題になっているのかといった視点について、教員にも意思統一をして子どもたちに働きかけていきたい。</p>
野原委員	<p>岐阜高校に限らず、色々な高校でそういう取組みが進んでいくといいと思っているので、また情報発信をよろしくお願いしたい。</p>
近藤委員	<p>今の子どもたちは、わりと経験値が少なく育ってきているところがあると思うので、教科横断的な視点や、グローバルな視点で、色々な体験をできることは、これからの進路選択をしていく上でも、とてもいい取組みだと思う。</p> <p>石田校長がおっしゃったように、広い視点からふるさつを見直すという視点や、専門を深めていくときに、文系・理系の壁があるということは、わりと大人になってから困ることもあるので、動画の最後の生徒の感想にもあったように、そこを埋めていける視点を生徒が持てることはすごくいい機会だと思う。</p>
竹中委員	<p>大変素晴らしいことを始められたと思う。特に、岐阜高校は受験が忙しいと思うので、こういう取組みにどれぐらいの時間が割けるか等、色々なことがあると思うが、小学校、中学校、高校、大学と、こういう力を継続させていくような支援の仕方を考えていかななくてはいけない。</p> <p>今日の発表を、グローバル人材とふるさと教育がどう繋がるかと思って聞いていたが、世界で通用しようと思うと、やはりアイデンティティをしっかりとしなければいけないので、自分たちの存在の位置付けをよく勉強したり、考えるという意味では本当に面白いことに取り組まれている。一部の生徒だけやるのではなく、全体でこういう取組みに繋がっていくようなやり方になるとよい。</p>
稲本委員	<p>日本の良さというのは、自然も文化も、世界に誇れるものがたくさんあるが、世界を回って見ないとわからないことがある。だから、少しだけ留学するのではなくて、外国の方にも長く日本にいてもらう。外国にも3年ぐらいいないと、日本との違いがわからない。悪いところも良いところも見て、日本の本当の良さがわかる。岐阜県の人あまり世界に、興味を持っていないのではないかな。</p> <p>世界と繋がるような具体的な、いいきっかけがあると、人間って急に坂道をパッ</p>

	とジャンプすることがある。岐阜高校も、もう一つ何かあるとすごいジャンプをするのではないか。
村上委員	岐阜大学に「地域協学センター」という組織がある。地域の色々なシーズを大事にして、企業や自治体、地域住民と連携して、色々なものを見つけていこうというところなので、ぜひ高大接続プログラムの中で、より強固な連携をしていただくとありがたい。
清流の国 推進部長	<p>ありがとうございました。</p> <p>次に、慶應義塾大学 鈴木教授から、「ふるさと教育を支えるICTの活用について」発表いただく。鈴木教授、よろしくお願いします。</p>
鈴木教授	<p>私は、慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパスで教鞭をとっており、SFC研究所の中に、Society5.0時代の学びと教育・ラボというのがあり、私が所長で、副代表は、飛騨高山出身の認定NPO法人カタリバの今村久美さんである。</p> <p>慶応大学は文学部を中心に教員養成をしていたが、新しい観点で、特にICTについては多くの関係者もいたので、新しい切り口で教育を考えていこうというラボを立ち上げた。</p> <p>先般、岐阜県の教育委員会と、Society5.0ラボ等で連携協定を結ばせていただき、教員の養成、教員の学びの手伝いや、ICT教育について色々アドバイスさせていただくといったことを始めた。よろしくご指導のほどお願い申し上げます。</p> <p>本日は、今の岐阜、並びに日本あるいは世界の流れの中での岐阜の位置についてお話させていただきたいと思うが、色々に関心があるかと思うので、ぜひご質問いただければと思う。</p> <p>私自身はもともとは通商産業省で、情報政策の総括課長補佐などを歴任し、特に私が情報処理振興課にいるときに、日本の学習指導要領に教科「情報」というものを盛り込んだ。そのあと、慶応大学の助教授になって、参議院議員を12年間務めさせていただいたが、21世紀になってからも教育一本で、あと医療などをやっているが、通商政策は卒業して、文部科学副大臣を2回、文部科学大臣補佐官を4回務めさせていただいた。</p> <p>今日の岐阜高校の発表の中で大変嬉しかったのは、私が副大臣のときに、科学の甲子</p>



園を始めたいと、相当強硬に事務方をお願いをして、各県の教員の皆様に準備いただいたわけだが、岐阜高校と岐阜県は発足当初から熱心にご参加いただき、大変素晴らしい教育とサポートをいただいていることを大変心強く思っており、今日の発表も素晴らしいと思っている。

STEAMの話があったが、「STEAM」という言葉が初めて国際的な文書に入ったのは、G7の教育大臣会合が2016年にあり、その時の倉敷宣言の中で、それまでは「STEM」であり、「A」がなかったが、「A」を足そうということで、議長代行として倉敷宣言のドラフトの責任者をさせていただき取りまとめた。そういう意味でも、STEAMを非常にきちっと取り上げていただいて、ありがたい。

来年の4月から高等学校の新しい学習指導要領が始まる。目玉は、総合的な探究の時間の導入、理数探究、そして地理歴史科、公民科がかなり抜本的に変わり、暗記科目の代名詞と言われていた地理歴史科、公民科に、地理総合、歴史総合、公共という新しい科目を導入する。「覚える地理歴史科、公民科」ではなく「考える地理歴史科、公民科」を目指して、まさに思考力、表現力、判断力といったことを、地理歴史科、公民科もきちっと目指していくんだということで、新しい科目を導入することが決定している。

東日本大震災の後にできた福島県立ふたば未来学園などでは、未来への創造探究などをいくつかやってきた。それから、個別の高校では探究科をつくってやっている県もあるが、全県で新学習指導要領の導入に先駆けて、ふるさと教育と題した総合的な探究の時間を教科横断的に設けている県は、岐阜県以外にない。そういう意味では47都道府県の中でも、先進的な取り組みであり、心から敬意を表したい。

私は、大臣補佐官として、新しい学習指導要領の導入、そして大学入試改革の責任者を務めさせていただいたが、その意図を汲み取っていただき、リーダーシップをとっていただいている皆様に心から敬意を表したい。

今日の岐阜高校の発表も、本当に文句のつけようがないが、岐阜県の課題は、いかにこれを横展開していくかだと感じた。

岐阜県と協定を結んで間もないので、岐阜県のことを全般知っているわけではないが、今日の話は岐阜県の話と、全国の話が入り混じったコメントになる。

新しい学習指導要領の導入をめぐるっては、岐阜のようにすでに色々と試行錯誤を積み重ねている県が、こういった動きを全国展開することが非常に重要だが、これから最も

重要なのは、探究を指導していく体制、人的体制をどう整えていくかではないか。

私は、OECD教育・スキル局のアドバイザーをしており、「OECD教育 2030」というプロジェクトの理事もしている。まさにProject Based Learning (PBL) を積極的にやっていくべきである。その理由は3つある。

1つは、Creating New Value ということで、新しい価値を作ることが2030年に向けた教育の非常に重要な柱の一つである。

2つ目は、Taking Responsibility といって、責任をしっかりと取るということ。これを見習う生徒たちが身につけていく。

3つ目は、Reconciling Tensions & Dilemmas だが、緊張やジレンマと向き合い、調停し、乗り越えていく力を身につけていくことが大事である。

そして今回、「OECD教育 2030」は、「学びのコンパス」、「ラーニング・コンパス」というものを作って、その中で今の3つが大事だということや、あるいはもうPDCAではなく、少なくとも教育の現場においてはAAR、アンティシペーション（予想）して、アクション（実践）して、それをリフレクション（再考）する。このAARサイクルを回していくのが重要だとしている。

学校というのは、安心して失敗し、失敗から必要な失敗をして、そこからどれだけきちんとリフレクションしていくのか、学んでいくかである。

私はよくゼミ生に、「必要な失敗をした者から成功していく」と言っているが、本来学校というのは、みんなが色々果敢にチャレンジして、AARサイクルを回す場であるが、どうしてもこれまでの入試が、センター入試を中心として、減点方式というか、要するに正解が決まっていて、間違えたらどんどん100点から減っていくというものであった。受験を通じて間違えない資質を身に付けた人が、少なくともセンター入試などでは高得点を上げていく。ミスをしないことが大事であったわけだが、これからの世の中では通用しない。

マークシート型の知識、技能というものはもちろん一定程度必要だが、2040年に今ある仕事の49%がAIやロボットに置き換わってしまうということが言われている。そうなった時に人間の仕事は、AIを使いこなすこと、AIにできない仕事をやることである。

そこで、OECDが非常に重視しているのは、Agencyという言葉である。

Agencyは「主体性」といって、生徒、教員、学校の主体性、そしてもう一つ大事なことは、Co-agencyといっって、地域と学校がともに主体性を発揮するとか、教師と生徒がともにCo-agencyを発揮していくことが非常に重要だということが強調されている。

そして、知識や技能だけではなくて、態度と価値、AttitudeとValueが大事である。そういう意味でも、岐阜高校のやっている探究は非常に素晴らしいと思う。

簡単に言うと、板ばさみと想定外、そして、できれば修羅場。こういったことを高校生、場合によっては中学生に体験させるためにPBLをやる。プロジェクトをやれば必ず直ちに板挟みに合う。プロジェクトというのは社会に出れば直ちに分かるが、常にお金がなかったり人や時間が足らなかったり、あるいはトレードオフ、あちらを立てればこちらが立たず、経営にしても政治にしても、全てトレードオフ、板挟みの連続である。そして、リーダーになればなるほどその板挟みの中で苦しむ。

そして、想定外については、コロナを例にとれば明白だが、2年前には予想だにできなかったことが突然世界中で起こるわけである。

日本の課題は、文系の教育にある。例えば、理数探究については、我々もスーパーサイエンスハイスクールを相当長くやってきたので、各県の学校で、かなりノウハウも蓄積しているし、地域も含めた高校と大学の連携サポートは一定程度できていて、世界的に見ても非常に良い水準にあるのではないかと思う。

奇しくも岐阜高校の生徒がおっしゃっていたように、この文理分断からの脱却というものが、我が国の最大の課題である。

そして、これは林芳正文部科学大臣のときに、「Society5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会」というものがあり、大臣自らが座長を務め、私が座長代理を務めたが、その時に出た2つの大きなキーワードの1つが「文理分断からの脱却」、もう1つは「公正な個別最適化」である。20世紀においては非常に重要なことだったと思うが、日本はあまりにも形式的な平等主義を貫き過ぎてきた。文理融合型、特に文系における探究、それがすなわち総合的な探究のクオリティにも繋がるわけだが、ここをしっかりとやっていかなければいけない。

そうすると、OECDが「学びのコンパス」をつくり終えて、今一番重視しているの

が、「ティーチング・コンパス」いわゆる、教え方のコンパスである。

特に、探究的な学びを誰が指導するのか。大学において、理系の教育は、ある程度探究的な学びをしっかりとやれている。そして、理系の学生の多くは修士にも行く、研究室にも入るということで、卒論にしても修論にしても、相当探究的なことを身につけた上で、大学を卒業していくということができていると思う。

一方で、文系の教育は、Student-Teacher Ratio (S T比) の問題もあり、あるいは研究室に入れない学生、例えば東大法学部などは、研究室に入れない、ゼミに入れない学生が存在する。それは、S T比が余りにも理系に充実していて、文系が劣っている。これは国立、私立問わず、この文理のS T比の、或いは投入される資金の多さというものが非常に極端に異なっているということからも言える。

世界大学ランキングは、世界中の大学の上位5%をノミネートしているものだが、今、日本の各大学が頑張っていて、2016年は46校だったのが、現在は118校がノミネートされている。世界には大体2万5千ぐらいの大学があり、5%というと1,200、1,300校になるが、世界のトップ5%に岐阜大学も含めて118校の大学が入っている。この序列を見てみると、文系が少ない大学、要するに文系の比率の逆数が順番そのものになっている。

つまり、日本の理系は世界で競争力があるが、日本の文系は世界で競争力がないということ。そういった問題の中で、文系出身の教員も探究力をしっかりと身につけていかなければいけないと痛感している。

もう一つ決定的に残念なのが、英語のコミュニケーション能力、あるいは、英語でグループワーク、プレゼンテーション、ディスカッションする能力が、日本は致命的に劣っている。

インドネシアやマレーシア、場合によればアフリカといった国と比べても、ここには大きな問題がある。これをどういうふうに取り組んでいくのか。やはり入試改革もやっていかなければいけないということで、4技能試験、特に話す試験の導入が一旦は決まったわけだが、共通テストには入れないという結論になった。各個別大学がそれをやっていくことになるが、現状、中央教育審議会の、第3期教育振興基本計画で定めている高校生が満たすべき4技能のスコアを満たしている県は、47都道府県中4県しかない。岐阜もその4県には入っていない。

そういう意味で、若い人たちが、グローバルに、国籍や人種を越えて、そして文系的なことも理系的なことも含めて、グローバルコミュニケーション、コラボレーションができるかどうかは、非常に大きな課題であり、そこを、岐阜県、岐阜高校、あるいは日本全体としてしっかりと力を入れていかなければいけない。

ただ、総合探究については、私は岐阜県及び地方の高校にもものすごいチャンスが巡ってきたと思っている。岐阜県と協定を結ぶ前から香川県三豊市や山口県萩市と一緒に高校生の探究を指導してきたが、地方の方が探究の課題が高校生の身近にある。それから、地方の方が地元の協力が得やすく、市役所あるいは町役場を挙げて高校生の学びをサポートしていただける。こんなことは東京都ではほぼ無理である。

そういう意味では、もともと地方は探究の課題に非常にアクセスしやすい、あるいは協力を得やすいというポジティブな面があったわけだが、これまでは、探究の指導について経験のある教員や、それをサポートできる体制が、他に比べるとやや脆弱であった。

しかし、これを劇的に変えてくれたのがまさにオンライン学習であり、まさにICTによって、今まではなかなか東京やニューヨークにいるOBに岐阜高校に来て話をしてもらうのは大変だったと思うが、例えば、オンラインでNYから話してもらうということが、いとも簡単にできるようになった。私どもの学生は、オンラインとオフラインとを組み合わせ、今は岐阜県の教員に対してだが、これからは高校生、中学生に直接アプローチができる。

特に慶応大学のSFCは、総合型選抜、AO入試のメッカであり、1990年から30年間、AO入試をやってきた。

このたびの入試改革の中で、国立大学協会が、総合型選抜を入学定員の3割まで引き上げるとアナウンスしており、岐阜大学、名古屋大学では3割やるということをコミットしている。

東京大学、京都大学は、おそらく1割程度でとどまると思うので、旧七帝大の中では、名古屋大学と東北大学が最も総合型選抜の枠を多く設定することになると思っており、あと筑波大学などが現状3割で5割まで引き上げると言っているし、SFCは、もうすでに一般入試者の比率が5割を切っている。

総合型探究を思いきりやって科学の甲子園を目指したり、あるいはスーパー・インクワイアリー・ハイスクールの課題を一生懸命やった人は、その努力と成果がきちんと評

働かれるという入試の体制ができたので、その結果、本当に世の中が劇的に変わっている。私が実行委員長で今村久美さんが副実行委員長をやっている「高校生マイプロジェクトアワード」というのが、8年前に始めたときは、高校生18人の参加しかなかったが、今年の3月にはなんと、全国から1万3,000人、4,905のプロジェクトのエントリーがあった。

これぐらい、探究活動については劇的に変わってきている。中高年の教員というのは私も含めて、自分が高校生の時はこういった入試があまりなかった。しかし、自らが探究活動を高校生の時にやってきた学生、院生が高校生の学びを支援する時に最も戦力になる。その学生が、今は、オンラインで高山や大垣の高校生にも直接アプローチができる体制が整っている。これは非常に良いことである。このチャンスにぜひ身につけていただきたい。

今、小中学校については、GIGAスクールで一人一台タブレットがようやく実現した。ただ、47都道府県を見ると、高校段階においてタブレットの普及が十分でない県がものすごくある。そういう中で、岐阜県はきちっとできている。こういった一人一台タブレット、そして、その学びが全部アーカイブされるということになると、まさに1つの学校の閉じた学びというものが一挙に広がる。東京の学生と、岐阜高校の学生が日常的にコラボレーションしていくということがいとも簡単であるし、あるいはオーストラリアの高校生と岐阜高校の高校生が共同研究をするということも、いとも簡単である。

もう一つ、ぜひやっていただきたいのは、県内の、特に岐阜のように、都会と地方を抱えた特色の多い県においては、県内の高校生が高校の枠を超えて、インターネットを使った総合的学習をするのはものすごく意味があると思う。高山から岐阜までの移動は何時間もかかるわけで、これまでどうしてもその点が非常に難しかったと思う。加えて、もう一つはアーカイブできるということ。要するに、先輩たちの作品をじっくり見ることができる。これらは、探究学習支援教育のものすごい研究の財産。そして研究の財産が良き学習法、研究法の財産になっていくわけである。そして、それをアーカイブする中で、今まで思い込んでいたことが実は違ったのだという話が幾つも出てきている。

そういう意味で、ICTをフルに活用して、この素晴らしいふるさと教育を、ぜひ、さらに展開していただきたいと思います。

岐阜のことについては素晴らしいことばかりだが、岐阜に限らず、今本当に教育が150

年ぶりに転換点を迎えている。

そこで、教員の学び直し、あるいはマインドセット、教員像の再定義。もう教員は教える人ではない。

「NHK for School」は、NHKが莫大な制作費を使って作った素晴らしいコンテンツである。日本は実は教育コンテンツ大国である。そういう意味で言うと、一方向型の授業を教える教員はこれからあまり必要なくなる。

まさに公正な個別最適化だが、それぞれの子どもの関心は違う。それから意欲の引き出し方も違う。疑問に思うポイントも違う。まさに1対1のインタラクティブな個別対応ができるかということになると、教員の側に相当幅の広い、そして深い引き出しがあって、そしてそれを子どもたちの意欲、関心、態度、そして認知構造に応じて出していくというものすごいプロフェッショナルリティがいる。

もちろん、教鞭をとりながらの研修ということは非常に重要であり、私たちも今お手伝いを始めているが、どうしても高校の現場は忙しいので、半年でも1年でも、一旦高校の現場を離れて、教職大学院でもいいし、高校の場合は必ずしも教育学部、教職大学院である必要はなく、理学部の研究科でも、社会科学の大学院でも、どんなところでもいいので、ぜひ、もう1回、今までやってきた学びを振り返り、そして今世界で起きていること、それは、世界の教育で起きていることもそうだし、イノベーションもそうだし、あるいは世界的な、地球的な、環境的なSDGsの話、あるいはポストSDGsの話などを学んでほしい。

私は自民党の「日本well-being 計画推進特命委員会」のワーキンググループの委員をやっているが、SDGsを学んだと思ったら、次はもうポストSDGs、ウェルビーイングだという話だが、これはOECDとか、国連ではもう非常に大きな流れになっている。

こういったことをきちんと学び直すためにも、研修定員をしっかりと取って、教員の学び直し、そして採用のあり方を見直すということ、新しいパラダイムに向けてやっていただくことが必要ではないかと思う。

私も微力ではあるが、ぜひお手伝いさせていただきたいと思うので、引き続きのご指導をよろしくお願い申し上げます。ご清聴、誠にありがとうございました。

意見交換	
稲本委員	<p>今言われたように、教員のマインドセッティングをやらないといけない。何かいいアイデアがあるか。</p>
鈴木教授	<p>私が所属する慶応大学の研究室は、チームティーチングでやっていて、市町村職員を相当受け入れている。東大の公共政策大学院も県から受け入れている。特に慶応の場合は、当初は、半年だけ東京に来て、1年半は地元でということではじめたが、最初の半年もオンラインになってしまったので、ずっと地元に来ていただいて、まちづくりや人づくりといった地元の課題にグローバルに取り組んでいただいている。</p> <p>2年間、私たち教員や、ストレートマスター、大学生などと一緒に机を並べて、30歳、40歳になった地方公務員の皆さんが学んでいる。この横の学びがものすごく刺激になっているのではないかと思います。</p> <p>教職大学院に派遣することもとてもいいことだと思うが、その中に教員の多様性ということが求められるので、様々なところに派遣するとよい。例えば、ハーバード大学の教育学のマスターは日本にいながらにしてオンラインで取れる。こういうことも、去年から可能になってきている。</p> <p>今までとはかなり違った学び直しの環境ができていますので、ぜひそういったことを一度見直していただければ、かなり教員のマインドセット、カルチャーショックに近いことを経験できるのではないかと思います。</p>
知 事	<p>本県と協定を結んでいただいて、色々ご指導いただいているが、今日、全国的な課題の中での岐阜県の位置付けも示唆いただき、ぜひ引き続きご指導をお願いしたい。特に、最後に言っておられた職員の受け入れ、学び直しについてはぜひ、具体的な進め方をまたご相談したいと思うので、よろしくをお願いしたい。ぜひ一度、岐阜においでいただいて、意見交換させていただければと思う。</p> <p>岐阜のふるさと教育について色々触れていただいたが、ふるさと教育を強く打ち出した一つのきっかけは「地方創生」である。安倍内閣の地方創生では、人口減少、少子高齢化がテーマであるが、岐阜県の場合、農業政策であれ、産業政策であ</p>



れ、教育であれ、すべての政策にわたって、人づくり、人材確保について総ざらいをしようということで、私どもの地方創生の一丁目一番地に位置付けてやってきている。そうした中で、今日紹介のあったようなふるさと教育についても、いろんな実践がある、ということが一つである。

それからもう一つ、岐阜には日比野克彦さんという世界的に有名なアーティストがおり、東京藝術大学の学部長で、岐阜県美術館の館長でもあるが、彼の言葉をお借りすると「若い頃、岐阜で一生懸命勉強した。さらに、岐阜にないことを学ぼうと思って、東京に行って芸大に行った。色々学んだ。東京にないことをさらに学ぼうと思って世界の舞台で頑張ってきた。世界で頑張れば頑張るほど、世界になくて日本にあるもの、世界になくて岐阜にあるものを感じるようになった。ということで、岐阜に戻ってきた。」という話である。私もそういう意味では通産省も含めて、色々修行させていただいて、岐阜に戻ってきた。岐阜、東京、世界、地球、人類、その循環の中にふるさと教育が位置づけられていく。今日、石田校長が言われた「広い世界から岐阜県を見る」ということに集約されるのだろうが、県の行政としてそういう流れの中でふるさと教育の手伝いをしていこうと思っている。

今日の鈴木教授の話の中で、地方ならではの特徴として、課題が身近にある点と、地元の協力がある点が指摘されたが、そのことは私も実感している。あらゆることが非常に素早く分かりやすく取り組めるというのは、おっしゃるように、まさに地方ならではのと思っているので、そのメリットは大いに活かしていきたい。

それから、コロナ禍の中で、いち早く、すべての県立高校の生徒にタブレットを配り、オンラインについてもかなり進んできているので、そちらも含めて、おっしゃるような様々な取組みができるのではないかと。

そのほか、「人づくりをする人づくり」をどうするかということについて、学校教育だけではなく、あらゆる分野で課題になっていると感じており、学び直しについて、人の派遣なり色々と考えていきたいと思っているので、具体的なご指導をよろしく願いたい。

また、「OECD教育 2030」という刺激的なアプローチのご紹介があったが、こうした門外における議論の状況についても教えていただければありがたいと思うので、よろしく願いたい。ありがとうございました。

<p>教 育 長</p>	<p>色々な施策やふるさと教育などを進める中で、それを検証する、どういう成果が上がったかというのは、やはり子どもの姿だと思う。</p> <p>先ほどの岐阜高校の講演者2人も岐阜高校のOBで、あちこちで活躍しているというのも、そうした成果だと思っている。子どもたちが小中高と12年間学び、さらに大学まで学ぶ間には、確実に学習指導要領が一回変わる。そうした中で、子どもたちのこの縦の育ちというものも、私たち教育委員会としては決して忘れてはいけないと思う。</p> <p>もう一つ紹介したいのが、ふるさと教育の一部であるスーパーハイスクールというのが県内で20校ほどあり、その学校が集まったセミナーがある。岐阜大学地域協学センターに5年前からご協力をいただいております、そこで子どもたちが案を出したものが、議員提案という形を経て、毎年、県の施策になっている。</p> <p>子どもたちにやる気を起こさせるのは、子どもたちがやったことをどう認めるのかということが、子どもたちが先に進むための一番大事なことだと思うので、ぜひそういう視点でもまた、皆さん方からご示唆いただければと思う。</p> <p>本日は本当に皆さん方からの貴重な意見いただき、ありがとうございました。</p>
<p>清流の国 推進部長</p>	<p>それではこれにて、岐阜県総合教育会議を終了させていただく。</p> <p>本日はどうもありがとうございました。</p>